

8 信徒発見・プチジャン神父

1858年に日仏修好通商条約が締結されてから、両国の間で様々な文化交流が生まれました。日本に渡ったフランス人の一人であるベルナール・プチジャン（1829-1884）は、パリ外国宣教会の宣教師として1862年に横浜に上陸し、1864年に長崎に赴きました。1858年に締結された日仏修好通商条約によって、長崎の外国人居留地に住むフランス人のための教会建築が許可され、1865年に大浦天主堂が完成しました。



Bernard-Thadée PETITJEAN
(フランス国立図書館)

大浦天主堂は、当時では珍しい洋風建築であったことから評判となり、近所の住民からは「フランス寺」や「南蛮寺」と呼ばれて見学に来る住民がいました。プチジャン神父は、日本人にも教会を開放し、自由に見学できるようにしました。なぜなら、プチジャン神父は、16世紀末からキリスト教弾圧が続いた日本でも、密かに信仰を持ち続けている人がいるのではないかという期待を持っていたからです。

1865年のある日、大浦天主堂を訪れた数名の女性が、「私たちもあなたと同じ信仰を持っています。聖マリア像はどこにありますか。」と神父に尋ねました。天主堂に姿を見せたのは、キリスト教が弾圧されていた江戸時代に密かにキリスト教の信仰を守り続けていた「隠れキリシタン」でした。プチジャン神父による「信徒発見」はヨーロッパに伝えられ、大きなニュースとなりました。その後、キリシタンだと名乗る者が次々と現れました。弾圧を逃れるために、仏教のお経のような祈りを唱え、仏像のような聖マリア像に手を合わせ、神道のような儀式を行っていた隠れキリシタンに対して、プチジャン神父はカトリック信仰を教えました。

プチジャン神父は、人生の後半を日本人のために捧げ、1884年に長崎で生涯を終えました。大浦天主堂は1953年に日本の国宝に指定され、この天主堂を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、2018年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。

掲載日：2021年10月1日